

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：32680

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870152

研究課題名（和文）「都市計画」概念の複数の起源とその影響関係に関する研究

研究課題名（英文）Study on the plural origin of and its mutual relationship between urban planning concepts

研究代表者

松田 達（MATSUDA, Tatsu）

武蔵野大学・工学部・講師

研究者番号：80624759

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀後半以降のヨーロッパ、アメリカ、日本において相次いで発展してきた「都市計画」概念の、複数の起源とその影響関係の主な流れを解明するとともに、「都市計画」の位置付けを、より大きな「都市論」という枠組みの中で把握した。特にヴェルナー・ヘーゲマン、ル・コルビュジエ、パトリック・ゲデスといった、複数の国において横断的に「都市計画」に影響を与えた人物の活動に注目することによって、「都市計画」という概念が各国間においてどのように変貌と発展を遂げてきたのか、その過程を明確にした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we elucidated the main flow of plural origin and its mutual relationship between “urban planning” concepts which have been developed successively in Europe, America and Japan after the latter half of the 19th century. Also, we clarified the position of “urban planning” in the larger “urban theory” framework. By focusing on the activities of persons who have influenced “urban planning” especially across multiple countries, such as Werner Hegemann, Le Corbusier and Patrick Geddes etc., we revealed the process of development and transformation of “urban planning” between these several countries.

研究分野：建築学

キーワード：都市計画 都市計画史 ユルバニズム ヴェルナー・ヘーゲマン イルデフォンソ・セルダ ル・コル
ビュジエ パトリック・ゲデス

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半以降、科学としての「都市計画」は、スペイン、ドイツ、アメリカ、イギリス、フランス、日本などにおいて、各国の事情のもとにそれぞれ発展してきた。それぞれの概念の発展過程において、他国もしくは他言語圏との影響関係はあったが、これまで「都市計画」の起源については、国ごともしくは言語圏ごとに語られることが多かった。

例えば国内では、石田頼房や渡辺俊一が日本の都市計画の成立を詳述しているが、英語圏と一部のドイツ語圏からの影響関係についてが中心で、特にラテン諸語圏における都市計画との関連についてはほとんど触れられてこなかった。そこで筆者はフランスの「ユルバニスム」の起源などとともに、ラテン諸語圏における都市計画について概説した(「ユルバニスムをめぐる」『10+1 No.45』、2006)。スペインについては、特にイルデフォンソ・セルダについての阿部大輔の研究、またイギリスとアメリカについては秋元福雄や中島直人らの研究が、ドイツについてはカミロ・ジッテを中心に海老澤模奈人の研究などがあるが、複数言語を横断しながら都市計画創成期の出来事について包括的に扱った研究はこれまでにほとんどなく、特に概念相互の影響関係について未解明な点が多かった。

アメリカではジョン・ピーターソンが『アメリカ都市計画の誕生』においてアメリカ都市計画の起源を明らかにしているが、主にアメリカ国内の問題のみを取り扱っており、ヨーロッパからの影響関係について触れているのはごく一部である。ヨーロッパでは、例えばフランソワーズ・ショエやティエリー・パコらがかなり系統的に都市計画(ユルバニスム)の起源について語っているが、日本も含めた「都市計画」の創成期における概念の総体を解明しようとする研究はこれまでになかった。したがって「都市計画」概念の複数の起源が、創成期において具体的にどのように総合に影響しながら発展してきたかということについては、これまでの研究でも明確になっていないところが多かった。

また「都市計画」の黎明期において複数の国を横断しながらその展開に影響を与えた人物として、ヴェルナー・ヘーゲマンやル・コルビュジエらが挙げられる。ヴェルナー・ヘーゲマンは、ドイツ出身で、ヨーロッパとアメリカを行き来しながら、特に1910年にベルリン都市計画展を統括したことで知られるが、一時期歴史的に忘れられてきた。近年になってクリスティアーヌ・クラゼマン・コリンズやキャロライン・フリックらによって、ヘーゲマンの再評価が進んできており、ようやくその歴史的な意義を再検討する段階に入ったといえる。ル・コルビュジエについては継続的に様々な研究が進んでいるが、特に近年これまで決して情報の多くなかったル・コルビュジエの1910年から1911年ご

ろのドイツ時代の行動がより明確になってきており、この時期の出来事とその後のル・コルビュジエの「都市計画」の考え方にどのような影響を与えていったのか、研究することが可能となってきたと言える。

このように「都市計画」の創成期については、これまでも様々な研究があるものの、その総体としての複雑な動きについての全体性を捉えた研究はほとんどなかったことが、本研究の背景として挙げられる。

2. 研究の目的

本研究では、こうした状況を背景として、「都市計画」の各国もしくは各言語圏における起源とその相互の影響関係を解き明かすことを目的とする。これらの全体像を明確にするため、特に次の影響関係に着目する。

a. スペインにおけるイルデフォンソ・セルダが「urbanización」として提唱した概念が、その後の各国の都市計画にどのように影響を与えていったのか。特にその定義において類似性があり、フランスにおいて約半世紀後に普及していった「urbanisme」の概念には、何らかの影響関係が認められるのかどうか。
b. ル・コルビュジエ(当時は本名のシャルル=エドゥアール・ジャンヌレ)がドイツ語圏における都市計画の概念「Städtebau」やベルリン都市計画展からどのような影響を受け、『都市の建設』を書くに至ったのか。
c. 英語圏における都市計画(Town Planning)の起源と日本などへの影響関係について。特にエベネザー・ハワードの提唱した田園都市と、同時期に活躍したパトリック・ゲデスによる市政学(Civics)が、どのように各国の都市計画に影響を与えていったのか。
d. アメリカの都市計画(City Planning)とヨーロッパの都市計画はどのように相互に影響したのか。特にヴェルナー・ヘーゲマンのように両者を橋渡しした人物の活動に注目する。
e. 日本における都市計画は、諸外国からどのような影響を受けながら発展してきたのか。特に、関一、池田宏、片岡安の3人が海外から受けた影響について。

これらの関係に着目しながら、本研究では「都市計画」という概念総体の発展過程を明らかにしつつ、さらには人口減少社会に突入した日本の都市が必要とする新たな「都市計画」の可能性を展望することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に海外及び国内の関係文献の精読によって進められた。また研究で扱う範囲が複数国、複数言語に広くまたがっているため、対象とする文献に漏れがないよう、各国の重要図書館等における文献調査も数度行った。

具体的には、スペインにおいてはカタルーニャ工科大学バルセロナ建築学校図書館、フランスにおいてはフランス国立図書館、ポンピドゥ・センター公共情報図書館、イギリスで

は大英図書館、王立英国建築家協会図書館、ロンドン経済大学図書館、ドイツ語圏ではベルリン工科大学建築研究所図書館、ウィーン工科大学図書館、アメリカではシカゴ大学図書館、MIT 建築・計画学部図書館、ハーバード大学 GSD 図書館、コロンビア大学建築学部図書館、プリンストン大学建築学部図書館、アメリカ国立公文書記録管理局において文献調査を行った。

4. 研究成果

(1) ヨーロッパとアメリカにおけるヴェルナー・ヘーゲマンの活動の整理

ヴェルナー・ヘーゲマンは、一時期歴史的に忘れられてきたし、日本ではほとんど知られていなかったが、都市計画創成期においてヨーロッパとアメリカをつなぎ、またベルリン都市計画展を通して同時代の都市計画家たちに広く影響を与えた極めて重要な人物である。本研究では、ヘーゲマンの活動の軌跡を明らかにして整理するとともに、ヘーゲマンが黎明期の都市計画に与えた影響とその意義について分析を行った。特に、ヘーゲマンが 1910 年にベルリン都市計画展を組織するに至った過程で「ボストン 1915」展への参加などアメリカでの経験が果たした役割、その背景としてのヨーロッパ各国におけるソーシャル・ミュージアムの相次ぐ誕生との関連、ベルリン都市計画展の当時の評価と若きル・コルビュジエに与えた影響などを明らかにした。さらに、ベルリン都市計画展が、同年のデュッセルドルフ国際都市計画展、ロンドン都市計画会議とともに後の都市計画の展開に与えた影響についても考察を行った。

(2) ル・コルビュジエの初期における都市計画に対する考えの変遷過程の明確化

ル・コルビュジエは、『都市の建設』を執筆し始めてからそれが大きく形を変えて『ユルバニスム』として出版する 1910 年から 1925 年までに、都市計画の原則となるモデルを大きく 2 度変更している。本研究ではその変更の過程を明確化し、後の都市計画に対する意義を考察した。

ル・コルビュジエは最初カミロ・ジッテの影響のもと中世主義的な都市計画に傾倒していたが、1910 年にベルリン都市計画展に訪れた後には古典主義的な都市計画へと考えを変え、さらにその 10 年ほど後にはテイラー主義的な考えを都市計画に導入していく。これらの変遷の過程を、クリストフ・シュノールによる『都市の建設』の未公開の草稿の発見といったごく最近の研究も参考にしつつ、またカミロ・ジッテやヘーゲマンとの時期によって変化する距離関係なども考慮して分析し、ル・コルビュジエの 3 つの都市計画モデルの特徴を明確にした。さらにこのような観点から「東方への旅」の意義をあらためて位置付けた。ヘーゲマンとル・コルビュジエとの接点に注目し、19290 年代に二人の間で

具体的に交わされた書簡と一度だけあった直接の出会いの意義を考察し、(1)の成果と合わせて、2017 年度日本建築学会大会(中国)において「ル・コルビュジエとヴェルナー・ヘーゲマンの接点について」として発表した。

(3) 欧米の都市計画創成期におけるパトリック・ゲデスの役割の包括的な位置づけ

パトリック・ゲデスは、長らく十分な評価がされてこなかった人物である。本研究ではゲデスが打ち立てようとした市政学(Civics)という学問と、その背景となるゲデスの幅広い活動に着目しつつ、ゲデスが欧米における都市計画創成期にどのような影響を与えていったのかを考察した。フランスの社会改良家ル・プレイや地理学者エリゼ・ルクリュらからの影響、ベルギーのポール・オトレを通したル・コルビュジエとの関係、シカゴ学派との距離関係、ソーシャル・ミュージアムの嚆矢としての「展望塔」の役割などから、多様な知的文脈のなかにゲデスを位置づけるとともに、複合的な手法を必要とする 21 世紀の都市問題に対するゲデス的アプローチの可能性を示唆した。またゲデスと前述のヘーゲマンは、ともに国際的影響力を持ち、同時期に展覧会による都市への啓蒙を重視したことでも共通しているが、お互いにほとんど言及がない。この両者を比較することにより、二人をより明確に位置付けた。またこれらの成果を「欧米の都市計画創成期におけるパトリック・ゲデスの役割に関する考察」として、『武蔵野大学環境研究所紀要 第7号(2018)』に発表した。

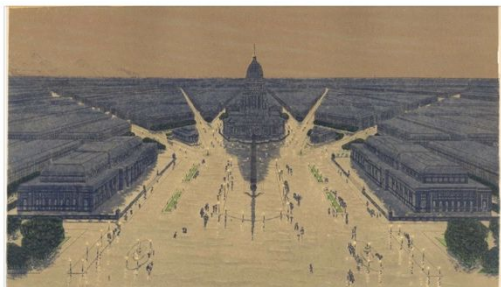
(4) スペインのウルバニザシオンからフランスのユルバニスムへの概念伝播の可能性の提示

本研究では「都市計画」の複数の起源について考察しているが、特にスペインにおいてイルデフォンソ・セルダが提唱した「ウルバニザシオン」と、後にフランス語圏において普及していった「ユルバニスム」は、その関係が明確ではない。概念は似ているが基本的には別々の起源を持つとされている。しかし本研究では両者の関係を歴史的に整理することで再検証し、レオン・ジョスリーやアンリ・プロストラフランスの建築家が、前者と後者をつないでいる可能性を示唆した。「ユルバニスム」が 1910 年にピエール・クレルジェによりヌシャテル地理学会で用いられたことは確かであるが、そのことが直後の 1910 年代前半に、パリの建築・都市関係者の間での「ユルバニスム」の普及に直接影響を与えたと考えるよりも、両者の関係を矛盾なく説明できる可能性がある。このような「都市計画」の複数の起源に関する概念の伝播経路について、包括的な考察を行った。

(5) 1910 年代を中心とした欧米及び日本に

おける「都市計画」概念の形成過程の整理
 「都市計画」創成期のヨーロッパ、アメリカ、日本をまたぐ複雑な概念の形成過程について、どのような相互関係のもと、現在の各国の「都市計画」が生まれてきたのか、包括的な整理を行った。特に 1910 年代を中心とした「都市計画」概念の都市計画史的な変遷とその意義については、中島直人氏とともに氏へのインタビューのかたちで、ウェブサイト『建築討論』内の連載「都市論の潮流はどこへ」にて、「20 世紀前半の都市論 1910 年代の断面図 (1/3): イギリス、ドイツ、スペイン、フランス」「20 世紀前半の都市論 1910 年代の断面図 (2/3): カミロ・ジッテ、ヴェルナー・ヘーゲマン、ル・コルビュジエ」「20 世紀前半の都市論 1910 年代の断面図 (3/3): 日本の都市計画創成期、アメリカのアーバニズム論」の 3 つの記事によって公開を行った (図 1)。

■都市論の潮流はどこへ Where the urban theory goes?



中島直人インタビュー「20世紀前半の都市論—1910年代の断面図 (2/3): カミロ・ジッテ、ヴェルナー・ヘーゲマン、ル・コルビュジエ」

連載【都市論の潮流はどこへ 第2回】 / 中島直人 / 聞き手: 松田達 / Series: Where the urban theory goes? 02 / Naoto Nakajima Interview "Urban theory in the first half of the..."



図 1: 『建築討論』における連載「都市論の潮流はどこへ」

ここではより大きな「都市論」という枠組みの中で、「都市計画」という概念を 20 世紀初頭に顕著なものだったと位置付け、「都市の認識論」が中心的課題のひとつとなる 20 世紀後半の都市論との違いを浮き彫りにした。また、都市計画創成期に関係する膨大な関連文献の整理を行い、「都市計画」の複数の起源とその関係については、それぞれの影響関係を踏まえた上で、ダイアグラムとしてまとめた (図 2)。なお、日本における都市計画の前身「市区改正」については、井上馨や東京府知事らの役割を明確にしつつ、初心者用に分かりやすく概説し、ウェブサイト『建築討論』内の連載「建築思想図鑑」にて公開した。



図 2: 国・言語間を横断的に見た「都市計画」概念の違い

(6) 研究成果の位置付け及び今後の展望
 これらの成果は、特に日本においてはじめて「都市計画」の概念を複数国・複数言語間を横断しながら全体像を把握する、はじめての内容だったと言える。国外においても、これまで本研究のように広い射程で「都市計画」の全体をまとめたような研究はなかった。特に「都市論の潮流はどこへ」にて掲載された内容は、相当に包括的であり、さらなる研究の展開可能性を多数示唆した。また、ウェブサイトに掲載されたことによって、多くの読者にその知見を広めることが出来たはずである。本研究は研究範囲を 1860 年代から 1920 年代としていたため、1930 年代以降についてはまだほとんど触れていない。今後、本研究の成果をもとに、今回の対象時期の「都市計画」の詳細な動きをさらに検討するとともに、1930 年代以降の「都市計画」の概念の展開過程についても、研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

松田達、ルネサンスの理想都市 (建築思想図鑑 第 3 回)、WEB 版 建築討論、査読無、2016、
<http://touron.aij.or.jp/2016/03/1059>,

<https://medium.com/kenchikutouron/ルネサンスの理想都市-24a55a2e686d>

松田達、市区改正 (建築思想図鑑 第 13 回)、建築討論、査読無、2017、
<http://touron.aij.or.jp/2017/12/4740>,
<https://medium.com/kenchikutouron/市区改正-b5f563e805b0>

松田達、欧米の都市計画創成期におけるパトリック・ゲデスの役割に関する考察、武蔵野大学環境研究所紀要、査読無、第

7号、2018、pp.137-146

松田達・中島直人、中島直人インタビュー「20世紀前半の都市論 1910年代の断面図(1/3):イギリス、ドイツ、スペイン、フランス」建築討論、査読無、2018、<https://medium.com/kenchikutouron/中島直人インタビュー-20世紀前半の都市論-1910年代の断面図-1-3-イギリス-ドイツ-スペイン-フランス-2e061ec5bba3>
松田達・中島直人、中島直人インタビュー「20世紀前半の都市論 1910年代の断面図(2/3):カミロ・ジッテ、ヴェルナー・ヘーゲマン、ル・コルビュジエ」建築討論、査読無、2018、<https://medium.com/kenchikutouron/中島直人インタビュー-20世紀前半の都市論-1910年代の断面図-2-3-カミロ-ジッテ-ヴェルナー-ヘーゲマン-ル-コルビュジエ-6ff0441fda22>

〔学会発表〕(計 1 件)

松田達「ル・コルビュジエとヴェルナー・ヘーゲマンの接点について」2017年度日本建築学会大会(中国)、2017年

〔その他〕

ホームページ等

・都市論の潮流はどこへ(「建築討論」内)
<https://medium.com/kenchikutouron/都市論の潮流はどこへ-4272dd1d54af>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田達 (MATSUDA, Tatsu)
武蔵野大学・工学部・講師
研究者番号: 80624759